



World Conference of Religions for Peace Japan

12  
2022  
December  
No. 518



WCRP いのちの森「第3回植樹会」

こころの扉——「マッコヨでなく、おすそ分けのパワーで」山越教雄	2
「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」	
2022年度第3回フォローアップセミナー開催	3~4
苗木に祈りを込め「第3回植樹会」	5
ウクライナ難民人道支援ボランティア第5、6次隊交流会	6
一乗フェスタ「触れる地球儀」出展	6
アジア太平洋女性信仰者ネットワーク主催のオンライン環境セミナー	7
平和研究所 第7回研究会	7
2023年度「新春学習会」「茶話交流会」のご案内	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



## 「マッチョでなく、おすそ分けのパワーで」

何やらこの頃、新聞の紙面では「敵基地攻撃能力（反撃能力）」とか「防衛費GDP比2%」とマッチョな言葉が飛び交っています。

政府は「国民の命と暮らしを守り抜く」（首相の施政方針演説から）との決意のもと、防衛力強化に努めてくれるのだと思います。しかし何となく、防衛力強化＝軍備増強の単純な思考になっていないか心配になります。

日本は戦後、一度も他国と戦争することなく過ごしてきました。それはやはり、憲法9条のもと専守防衛を掲

WCRP 日本委員会  
事務局次長

山越教雄



げてきたからに他ならないと思います。武力行使を放棄し、他国の脅威にはなりませんという宣言であったからだと思います。このことを「安心供与」と言うそうです。相手国に、こちらから武力は行使しませんと約束する（すなわち、相手国の不安を払拭し、安心を与える）ことによつて、自国への武力行動を思いとどまらせるということとです。

この憲法9条による宣言を、世界の構造を交換のあり様から捉えようと試みる柄谷行人さんは、その著書『憲

法の無意識』の中で、「贈与と呼ぶべき」だと言います。国際社会に向けられた「贈与」、贈り物であると。

私の住む田舎では、「おすそ分け文化」が比較的残っているように思います。時々近所のおばちゃんから自家製の野菜や果物をいただきます。すると私も、何かお返ししなければならぬ気持ちになります。実際には私の耕す100坪の畑には、そのおばちゃんにお返しできるほどのものはなく、いただいたままになることが多いですが。

マルセル・モースは『贈与論』の中で、贈与には返礼を義務付ける「力」があり、その力は贈り物に宿るハウ（精霊）によるものだ、マオリ族の例を挙げます。そして、このハウは生まれたところ、あるいはもとの所有者のもとへ帰りがると。しかも、贈られたものと同様かそれ以上の価値のものをお返ししない限り付きまとうというのです。

「安心」の贈り物を受けた国は、何かお返しをしなければならなくなるということになります。しかも、贈られた「安心」以上の価値あるものを。

思えば、「贈与」には仏教の「布施」「利他」に通じるところがあるように思います。仏典には「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死を恐れる。わが身にひき比べて、殺してはいけません。殺させてはいけません」（ダンマパダ129偈）とあります。殺されたくない者は他人を殺してはならない。自分がして欲しくないことは、他人にしてはいけない。ならばこそ、自分がして欲しいことを相手にさせていただく。平和で穏やかな生活を望むならば、個人であれ、国であれ原理は同じはず…。

## 「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」2022年度第3回フォローアップセミナー開催（水俣）

和解の教育タスクフォース主催「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」第1期、第2期セミナー参加者を対象にした2022年度第3回フォローアップセミナーが11月12、13の両日、『つながる／つなげる』をテーマに熊本県水俣市で開催され、19人（スタッフ含む）が参加した。同セミナーの目的は、水俣病という過去の出来事から生じたさまざまな問題、水俣病が人びとに与えた影響を学び、それが現在にどうつながってきたか、さらに、一市民としてどう未来へつなげていくのかを共に考えることにある。

参加者は、水俣病当事者や関係者の体験に学び、水俣病によって生まれた対立から和解に至るまでのプロセスの過程や、平和創造の行動を生み出すファシリテーターとして活躍するため、過去に起きた問題を現在を通して未来へどのようにつなげるかというアウトプット（伝達）スキルのファシリテーション方法を学んだ。

セミナー開講前日の11日は、水俣病についての予備知識を得るため、オプショナルツアーを開催。一般社団法人水俣病を語り



チッソ水俣工場正門の前で

病歴史考証館を見学した後、『水俣病と地域社会について』と題して吉永氏が講演を行った。

翌12日には、水銀が流れ出ていた百間排水口遺構や茂道地区を見学し、チッソ工場と水俣の人びととの関係についてさらに学んだ後、親水護岸の慰霊碑前で、すべての命のために歌と黙とうを捧げた。その後、水俣病資料館を訪問し、パネルや写真、モニターテレビ等を通して、水俣病の歴史や現状、当時の被害者の苦しい病状や状況について学んだ。

午後には、和解の教育タスクフォースの山本俊正責任者（元関西学院大学教授）の開催あいさつとともに



親水護岸にて慰霊碑参拝

続く会の吉永利夫氏が案内し、チッソ水俣工場正門や最初の水俣病が発症されたといわれる水俣市坪谷地区を訪問した。

続いて、水俣

に本セミナーがスタートし、セッシヨン1では、熊本大学の石原明子准教授が『水俣病の概要とそこから生じたもの』をテーマに水俣の歴史や現況を含め、参加者の問題意識や質問への回答及び解説を中心に対話形式でセッシヨンを進めた。



石原明子准教授

水俣と内線地の問題との共通構図や、対立の変化をもたらすファシリテーターの戦略としての修復的正義や戦略的紛争変容論、水俣と福島の交流を紹介した。また、和解のファシリテーターとして、単なる技術や知識だけではなく、相手の痛みや触れられたくないところに私たちはどう接していきけるのが課題で、魂がどう伝播していくかという和解のファシリテーターの仕事は、単に教科書通りに被害者や加害者をミダイエーション（調停）していくことではないとし、赦しと和解の魂の伝播の場をどのように作っていくのかに重点を置いていくと述べた。

セッシヨン2では『過去から現在へどうつながってきたかを学ぶ』をテーマに、「水俣病資料館語り部の会」の杉本肇副会長が

水俣病患者家族の視点から、家族が水俣病になった当時のことや、水俣病が伝染病や奇病だとい



杉本肇さん

いう誤解・偏見による差別、患者家族としての生活や水俣病認定訴訟とその葛藤、水俣を離れたあとに再び水俣に戻ってきたこと、水俣病についてなかなか語れなかった状況や心情について語った。約40年間語られなかった水俣病について、水俣病資料館ができてやっと水俣の人びとも水俣病や患者について考えるようになったという。また水俣出身というだけで水俣病ではないかといわれるため、出身地を人に言えなかった状況に対して、子どもたちが水俣病について正しく学ぶことで、差別に対して知識をもって跳ね返すようになったと述べ、伝えていくことが我々の役目であると思うと語った。

13日のセッション3では、胎児性水俣病患者の永本賢二氏が、水俣病患者当事者、そして、胎児性患者として子どもの時から障がい者としての生活、チッソに勤務していた父が、自分の勤めていた会社に息子を水俣病患者として認めてくれと懸命に訴えてくれたことへの感謝の気持ちを語った。

さらに、学校で身体が不自由なことや、水俣病患者認定補助金による生活への差別を受け、つ



永本賢二さん

らい思いをしていたが、養護学校へ入り、障がい者と出会い、自分たちで何でもすることが当たり前というところも学んだという。また、苦労しているのは水俣病の人だけではないということも知り、考えが変わる中で、障がい者と一緒に学んで本当に良かったと思うとも述べた。いままも水俣病をめぐってさまざまな立場や考え方の人がいる。そのため、子どもたちがかわいそうに思える時があり、まだ水俣病は終わっていないと語った。

セッション4では、元チッソ水俣工場社員の浮島清己氏がチッソ水俣工場へ勤めるようになった経緯や勤務当時の水俣病への認識について語った。さらに、水俣で「もやい直し」が始まって、自分たちの町を自分たちの手で良くしようと水俣のために活動する会ができ、「水の経路図」「水俣地域資源マップ



浮島清己さん

の経路図」「水俣地域資源マップ

集」「水俣地域人材マップ」などを作成、それを利用して水俣町づくりを行ったこと、「もやい直し」はまだ進行中であり、継続することが大事であると語った。

最後のセッション5では、『未

来へどうつながっていくか』をテーマに、清泉女子大学の松井ケティ教授がワークショップを行い、3日間で感じたことや問題意識、どのような気持ちになったのか、コミュニケーションに寄り添うケアリング、ファシリテーターとしてできること、いまできることと未来へどうつながっていくかなどについてグループごとに議論して、発表し合った。

参加者からは、「現地で、語り部さんのお話を聞いたからこそ、自分事として問題を引き寄せるスタート地点に立てたように思う」「問題の概要と、その中で生きてきたさまざまな立場の方の話しをうかがいながら、赦し、怒り、癒やし、さまざまなプロセスが和解の中にあるということをようやく自分に落とし込めた」という声があった。



発表する参加者

## 苗木に祈りを込め「第3回植樹会」

気候危機タスクフォースは11月19日、「第3回植樹会」を埼玉県所沢市の「WCRPいのちの森」で開催した。これにWCRP日本委員会加盟教団の信徒・信者や行政関係者など約70人が参加した。

開会式では、西田宗敬同タスクフォースメンバー（一燈園）の司会のもと、田中庸仁同タスクフォース責任者（真生会会長）の開会あいさつ、「いのちの森」の土地を共同管理する「堀口天満天神社周辺緑地を守る会」の中村昭代表があいさつをした。

続いて、田中責任者や諸宗教者、所沢市役所職員、参加者代表ら9人がアカマツとコナラの苗木を記念所植樹した。



記念植樹

その後、グループに分かれた参加者たちは、アカマツとコナラの苗木計12本を成長の願いを込めながら、一本一本丁寧に植えていった。



苗木の成長を願って記念写真



参加者からは「土を掘るのが大変だったけど、大きく育ってほしい」「コロナ禍で、遊ぶ機会が減った子どもたちが楽しそうだったので、親としてうれしかった」「少

すでも緑化の役に立ちたかった」などの感想が聞かれた。最後に、菌田稔同タスクフォース運営委員（秩父神社宮司）が閉会あいさつを述べた。

※

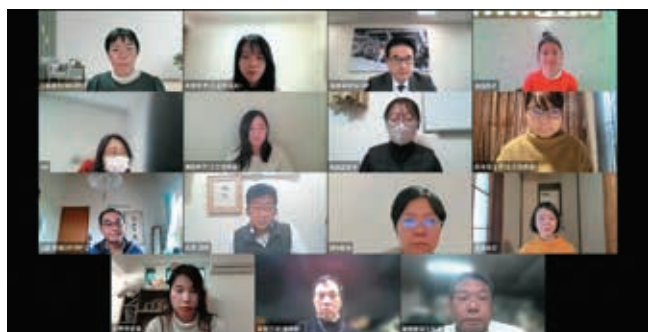


儀式の様子

7月14日「WCRPいのちの森づくり安全祈願祭」がいのちの森鎮守社の前で行われ、同タスクフォースメンバー、土地提供者など約10人が参加した。  
鎮守社は2020年7月、作業の安全を祈願するため、いのちの森の頂にある祠の横に新に社を鎮座したものの。  
当日は、神道の儀式に則り、堀口天満天神社を祭祀する朝日和久師（中氷川神社禰宜）の斎主の下、厳肅に執り行われた。朝日禰宜の祝詞奏上、四方禊、斎主玉串などのあと、参加者一人ひとりが玉串を奉納した。

## ウクライナ難民人道支援ボランティア 第5、6次隊交流会

WCRP日本委員会は、7月からウクライナ難民人道支援ボランティアをポーランドに派遣し、これまで4隊のボランティアが活動を行ってきた。当初は、第5、6次隊を10月から11月にかけて派遣する予定だったが、欧州での新型コロナウイルス感染症増加の影響を受け、急きよ派遣を休止することになった。派遣休止を受け、その経緯について説明を行うと共に、ボランティアメンバー



交流会に参加したボランティア隊

間の交流を図るため、第5、6次隊交流会を11月20日にオンラインで開催した。これに参加予定だった5次隊から4人、6次隊から4人のメンバーが参加した。交流会で

は、篠原祥哲WCRP日本委員会事務局局長が派遣休止に至った経緯を説明し、安勝熙あんすんひ同平和推進部長がポーランドでのボランティア支援活動についてプレゼンテーションを行った。その後、各隊ごとに分かち合いの時間を持った。メンバーたちは、ボランティアに応募した動機や願いを語り合うと共に、「ボランティアに行けなかったが、ウクライナ情勢を自分のことのように受け止めるきっかけになった」「日本でウクライナのためにできることはないか」などの感想を語り合い、それぞれの気持ちや今後の取り組みを共有した。

## 「乗フェスタ」触れる地球儀」出展

11月6日秋晴れの下、庭野日敬師（立正佼成会開祖）のWCRPにおける功績を称え振り返ると共に、会員間の交流を目的に「食べて遊んで、社会貢献！ こども秋まつり&WCRP乗フェスタ」を立正佼成会の有志職員と同大田教会が共催し、立正佼成会普門エリア（東京都杉並区〓普門館跡地）で開催した。

焼きそばやフランクフルトを焼く香りが漂う普門エリアには、綿あめやポップコー



「触れる地球儀」の操作に夢中

ンをほお張る子どもたちや散策する家族連れでにぎわった。各種模擬店や絵本交換市などのチャリティーバザーも出店した。今回、その一角のブースでWCRP日本委員会はデジタル地球儀「触れる地球儀」を活用した「感じる地球ワークショップ」を担当した。「触れる地球儀」には、世界の主要都市の様子を映し出すライブ映像、クジラや渡り鳥などの生き物が海中や大陸を横断していく様子、海面温度の上昇や津波の発生過程などが映し出される。子どもたちは、自分の操作によって変化する地球儀に、興味津々の様子だった。

## アジア太平洋女性信仰者ネットワーク主催のオンライン環境セミナー

アジア太平洋女性信仰者ネットワーク（APWFN）は11月29日、気候変動問題に取り組むためのオンラインセミナーを開催した。テーマは『気候変動への取り組みを進めるための私たちの信仰と精神性』。アジア・太平洋地域から約40人が参加した。初めに、パキスタン委員会のフマ・イクラムラ師が、6月に起こったパキスタン洪水の被災状況と支援の取り組みを紹介。国土の3分の1が水没したといわれる洪水の一因には、気候変動の影響があると言われている。イクラムラ師は、洪水によって多くの人がひとが危機的状況に置かれていると説明した。セッション1では、11月にエジプトで開催された第27回気候変動枠組条約締約国会議を受けての成果と課題を、ジェームズ・



バグワン師

バグワン師（太平洋キリスト教協議会幹事）が発題。気候変動への取り組みは一刻も猶予がないと強調し、

宗教コミュニティの結束した協力や啓発が不可欠であることを訴えた。その後、フィリップ・ローランド氏（オーストラリア委員会）がファシリテーターを務め、バグワン師の発題を受けてリリアン・シンソン博士（フイリピン委員会）、ディーパリ・バーノット博士（アジア宗教者平和会議ACRP共同会長）、クリスティーナ・リー師（韓国委員会）、イラ・マンギリロ博士（インドネシア委員会）が応答した。

セッション2では各国の気候変動への取り組みが紹介され、WCRP日本委員会の橋本高志平和推進副部長が、気候危機タスクフォースが展開している「いのちの森づくり」活動を紹介した。最後に、河田尚子APWFN事務局長（WCRP日本委員会女性部会副部長）が閉会あいさつを述べた。

## 平和研究所第7回研究会

齋藤忠夫所員

平和研究所の第7回研究会が11月29日、普門メディアセンター（東京・杉並）でオンライン併用のもと開催された。齋藤忠夫所員（東北大学名誉教授）が『未来につながる持続的な食事とSDGs』と題して発

表した。

はじめに、世界の5大宗教（キリスト教、イスラーム、ユダヤ教、ヒンドゥー教、仏教）者における禁忌食品について解説。次いで、近年、植物性食品をベースにした食生活が世界的な潮流になってきている現状を詳述した。

この中で齋藤所員は、健康に良さそうということで広がるベジタリアンやビーガン（徹底した菜食主義者）の長期的なリスクや子どもの成長・発達への危険性について言及。菜食にこだわり過ぎるとビタミンB2やビタミンD、カルシウム、たんぱく質、亜鉛などの摂取が難しく、出血性脳卒中、急性心筋梗塞、骨折をはじめとする健康被害を起こしやすいという研究調査結果を紹介した。

また、これまで食料生産に使用される土地面積や水使用量は、卵、豚肉、牛乳たんぱく質の生産には植物性食品の3〜7倍が必要とされてきたが、最新の指数を基にしたデータでは、動物性食品と植物性食品では評価が逆転していると述べた。そして「現状は、植物性食品は良い、動物性食品は悪いという対立構造であるが、単純な二元論からの脱却が必要で、新たな食料システムを構築していくことが重要」と指摘した。

## 2023年度新春学習会

## 茶話交流会のご案内

2月のロシア軍による軍事侵攻により始まったウクライナの人的危機状況を受け、WCRP日本委員会はウクライナ難民人道支援ボランティアをポーランドに派遣すると共に、9月にはWCRP/RfpP国際委員会と共催で、都内のホテルで諸宗教平和円卓会議を開催いたしました。

この円卓会議を受け、これらの諸宗教による和解への取り組みを評価すると共に、諸宗教による平和構築の実践について考える契機といたします。

来春の新春学習会は、飲み物とお菓子に



ちで開催します。

※プログラムの詳細及び参加方法は、WC

RP日本委員会ホームページまで。

## ウクライナの皆さまへ

## クリスマスカード

ウクライナ難民人道支援ボランティアの参加者から事務局へ、この冬を異国で過ご



さざるを得ないウクライナの方々宛てに、クリスマスカードなどが届けられました。早速、ポーランドへ向けて発送いたしました。

## 今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを

漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

## 苗愛（なえ）

植樹会で「WCRPいのちの森」に新たに植えられた小さな緑。やさしく育てていきたくと思います。

## WCRPの活動

## 《12月》

5日 女性部会第4回委員会（オンライン開催）

12日 災害タスクフォース第3回会合（東京・普門メディアセンター）

13日 青年部会第3回幹事会（栃木・アジア学院）  
※14日まで

15日 気候危機タスクフォース第2回会合（東京・普門メディアセンター／オンライン併用）

19日 平和研究所第8回所員会議（東京・新宿／オンライン併用）

## 《1月》

17日 総合企画委員会（オンライン開催）

26日 理事会、評議員会、新春学習会、茶話交流会（東京・立正佼成会法輪閣／オンライン併用）

掲載内容の無断転載を禁ず。